

志賀直哉年譜考（七）

——明治三十七年五月から八月まで——

生 井 知 子

明治三十七年（一九〇四）（数え二十二歳・満二十一歳）

5・1（日）直哉は一日在宅。田中平一が来る。昇之助の「新版歌祭文」野崎村の段の評を「浄瑠璃」に送る。朝九時、芝亭愛古が死去。ポート仲間だった。（日記）

5・2（月）大雨。直哉は、正親町公和と芝亭の家に弔問。赤十字社病院に痔で入院中の川村弘を見舞う。昇之助姉妹三人の写真が載った雑誌（「浄瑠璃と文芸」、4・30川村弘日記）を貰う。（日記）（「興津」）（正親町公和「義太夫好きだった弘君」平芳舟遺稿）

七時過ぎ、田中平一が来て三人で宮松亭に行く。万八の「伽羅先代萩」六段目（御殿）、団栄の「傾城阿波の鳴門」、小清の「菅原伝授手習鑑」四段目切（寺子屋）を聞く。（日記）

5・3（火）直哉は朝一時間授業を欠席。帰り、三回会の会報を発行。夜、田中平一、柴山昌生、林三郎の家に行き、ターナー像を貰う。（日記）

5・4（水）朝、直哉は井上病院に行ったが主人不在。昼頃、蓬萊亭に行く。有島生馬と赤十字社に川村弘を見舞い、義太夫の話をする。終日授業を休む。（日記）

- 5・5(木) 朝、直哉は井上病院で注射。「作文」の課題五題のなかに「菜の花」のテーマがあり、アンデルセン張りに書く(↓後の「菜の花と小娘」)。放課後、三回会を岡部長景の家で開催。(日記(木下利玄日記))
- 5・6(金) 靖国神社大祭で、学習院学生一同参拝。(「学習院一覽 明治三十八年九月—三十九年八月」(記事摘要))
直哉は井上病院の帰り、正親町公和の家に寄り、靖国神社を拝し、中西屋で『演劇史』と「Greek Heroes」を買ひ、有馬頼寧の別荘に行く。久本亭に行く。綾登司の「伽羅先代萩」六段目(御殿)、吉花の「契情會我郎龜鑑」(小磯ヶ原)、広勝の「本朝廿四孝」四段目(十種香)、田昇の「新版歌祭文」野崎村の段、昇之助の「菅原伝授手習鑑」四段目切(寺子屋)を聞く。(日記)
- 5・7(土) 直哉は、終日学習院を休み、午後から有馬生馬の家に行き、増田英一を誘い、上野の太平洋画会を見る。田中平一の家に寄り帰宅。田中平一が来て十時まで遊ぶ。(日記)
- 5・8(日) 二時頃、直哉は有馬生馬と、赤十字社病院に川村弘を見舞う。伊東もやつてくる。昇之助の話で盛り上がる。直哉は川村に『近松之研究』を貸す。六時頃帰宅。夕食後、日露戦争の連戦連勝を祝う提灯行列を見に行く。琴平亭に行く。愛子の「伽羅先代萩」六段目(御殿)、万八の「桜鵝恨鮫鞘」(鱧谷)を聞く。相馬碩子・元子が来宅。(日記)(『芳舟遺稿』所収川村弘日記、5・9川村弘日記)
- 5・9(月) 朝より直哉は授業は休み、一年級の野球の試合を見る。午後井上病院に行く。夜、田中平一の家に行き、十時頃帰宅。岩下家一が来宅、しばらく話す。(日記)
- 5・10(火) 直哉は、朝、広瀬中佐と志賀家の墓参り。学習院では、林博太郎の「独文」は休講、南日恒太郎の「英文」は出席。帰宅後、華族女学校の運動会を見に行く。川村弘から渋沢の恋人は昇菊であるとの手紙を受け取る。川村弘に二通、有馬生馬に通、井上に一通手紙を書く。(日記)
- 5・11(水) 直哉は昼休み、「人とり」をして遊ぶ。「武課」が馬鹿けていやでたまらないと思う。晩、田中平一が来宅、九時半頃

まで遊ぶ。『コリヤー』を岩倉道俱に、『青年の誘惑』を伊東に貸す。(日記)

5・12(木) 千秋季隆の「作文」、熊本謙二郎の「英文」の授業など。直哉は、熊本の時間以外は、「心中天の網島」を読む。昼休みは「人とり」。正親町公和の家に寄り、井上病院に行く。晩、『The History of John Bull』を勉強する。大阪に行く。岩村薩馬の送別に、新莊の家を訪問。(日記)

有島生馬が直哉を通じて川村弘からの昇菊の節操に関する切り抜きに接したという葉書が、川村に届く。(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

5・13(金) 直哉は、「コニック」を始める。有島生馬・松平春光と、黒木三次を見舞い、四人一緒に川村弘を見舞う。晩は「冥途の飛脚」上巻を読む。『青年の誘惑』を白杉義雄に、『後世への最大遺物』を伊東に、トルストイを田村寛貞に貸す。(日記)

5・14(土) 午後十二時半より、小雨の中、第一回春季陸上小運動会を開催。中等学科四年級から高等学科三年級までのクラスレースでは、一位・仙石政恒(高)、二位・黒田長敬(高)、三位・松方金次郎(中六)。(M37・6「学習院輔仁会雑誌」63号「雑報」)

直哉は朝一時間欠席。昼からの運動会ではくじ係。帰途、直哉は田中平一と有島生馬の家に行き、増田英一を誘い、久本亭に行く。吉花の「鷗山姫捨松」(中將)、広勝の「恋娘昔八丈」鈴ヶ森の段、団昇の「御所桜堀川夜討」、昇之助の「心中紙屋治兵衛」、掛け合いの「仮名手本忠臣蔵」七段目を聞く。十一時半帰宅。(日記)

5・15(日) 午前、直哉は、中西屋で『紀海音浄瑠璃集』と『言海』を買い、井上病院に行く。午後、田中平一が来宅。「時好」(三越呉服店発行。泉鏡花「千鳥川」が掲載された)、「壺坂靈驗記」の五行本を持ってきてくれる。夜、斎藤緑雨を読む。聖書を読んで寝る。(日記)

5・16(月) 直哉は久々に「国文」の授業に出る。横井也有「百虫譜」はなかなか面白いと思う。「数学」は休講。放課後、華族

会館に、有馬良橋中佐の談話を聞きに行く。晩は「冥途の飛脚」を読んで寝る。（日記）

5・17（火）直哉は朝一時間授業を休む。昼休みは「西洋鬼ごっこ」。帰り、正親町公和・裏松友光・武者小路実篤・吉光長一と、

武者小路と正親町の家に寄る。井上病院に行く。九段の上で、洋装で騒いでいる菊五郎兄弟を見かける。有馬生馬の家に寄る。（日記）

5・18（水）直哉は一日授業を休み、朝、正親町公和と赤十字病院に川村弘を見舞う。もし木下利玄が来たら遊びに来いと言つて

くれと伝言して、十二時半頃、正親町と帰宅。五時前から二人で田中平一の所に行き、利玄が来宅した際は不在。夜、利玄は、直哉にあまりつれないとの意味の葉書を出す。西鶴『本朝桜陰比事』を読む。（日記）（木下利玄日記）

5・19（木）直哉は「作文」は「出征の友人に与ふる文」と「異林子天才論」を出す。夜一寸、「The History of John Bull」を勉強する。（日記）

5・20（金）直哉は一日授業を受け、井上病院に行き、晩、田中平一と新富座で観劇。「成田産不動万吉」を見る。芝鶴、荒次郎、

又五郎、九回次、勝太郎、銀之助、三田八、団次郎、宗右衛門、桃吉など。銀座の夜店でバッハの立像を買う。（日記）（続々歌舞伎年代記 坤の巻）

5・21（土）直哉は学習院を休む。午後四時頃から田中平一と出かけ、宮戸座で観劇。「夜嵐」「艶容女舞衣」「積恋雪関扉」を見

る。訥子、源之助、鬼丸、寿美蔵など。この芝居ほど面白かったものは最近ないと思う。（日記）（続々歌舞伎年代記 坤の巻）

5・22（日）直哉は六時に起き、「聖書之研究」を読み、バラを切つて、十時に内村鑑三の所に行く。「ルカ伝」十章一—十六の講

義。昼頃帰宅。木村ヤス・ツル、志賀英子・直三と遊ぶ。英子・直三を連れて赤十字社病院の川村弘を見舞う。夜、田中平一が来宅。（日記）

5・23（月）千秋季隆「国文」は休講。朝、直哉は木下利玄に、宮戸座の夜の部の芝居は近来での面白いものだったとほめる。学

習院の帰途、直哉は正親町公和の家に寄り、靖国神社を散歩して帰宅。(木下利玄日記) (日記)

5・24(火)

午後、学習院出身の戦死者である陸軍歩兵中尉・松平恒吉の追悼会。(「学習院一覽 明治三十八年九月〜三十九年八月」
「輔仁會記事摘要」)

直哉は学習院の帰途、有島生馬の家に行く。小山内薫も来合わせる。十時頃まで話す。武者小路実篤より『鳩翁道話』を借りる。(日記)

5・25(水)

この日、川村弘は退院し、直哉に見舞の札状を書く。(「方舟遺稿」所収川村弘日記)

直哉は一日授業を休み、編纂室で「欧州歴史」のノートを書く。帰り、正親町公和と井上病院に行く。立花が「百花新報」に出た昇菊の不品行の記事を持って来る。後で有島生馬に送る。夜、田中平一の家に行く。林三郎が感情を害しているらしいと思う。「ルカ伝」を読んで寝る。(日記)

5・26(木)

直哉は、ブッフハイム『独逸読本』を勉強。木村正にバイオリンを教えてくれと頼まれる。夜、田中平一、正親町公和、立花と若竹亭に行く。広勝の「又助」、素行の「絵本太功記」十段目、団栄の「碁太平記白石噺」、大吉の「恋女房染分手綱」十段目、昇之助の「近頃河原達引」堀川の段を聞く。川村弘に手紙を書く。(日記)

5・27(金)

早稲田大学との野球試合。夜、直哉は、モーパッサンの「Mad」(「狂人」)を読む。(日記)

*「S君との雑談」によれば、英語の力は乏しかったが、モーパッサンは短いから読んだ。

*モーパッサン・チェーホフ・ゴリキー・イブセン・アンドレーエフ・シュニツラーなどを読み、短篇の書き方を勉強した。(「書き初めた頃」)(座談会「回顧」)(「私はかう思ふ」)(「稲村雑談」「読書」)

*モーパッサンやチェーホフなどの短篇を頭に置いて、その形から入っていくやり方で書いたが、段々それが嫌になり、自分独特の形を持ちたいような気持から、従来の小説の形からなるべく離れたという要求が強くなって来た。

(「書き初めた頃」)(座談会「作家の態度」)(対談「小説について」)

*対談『小説について』ではモーパッサンの形式に学んだものとして、尾崎一雄が『襖』『濁つた頭』などの名を挙げ、志賀も肯定している。

*話の筋は自身のものであるが、力が十分でない場合、短篇の形式にはめ込むとどうにか物になった。題名などもうまく浮かんで来ない場合、アフター・ディナー・シリーズという一冊五十銭の英訳モーパッサン選集を沢山持つて、その目次を一つ一つ見ていくうちに、ふとうまい考えが浮かんだりしたこともある。（『モオパッサン全集』推薦）

5・28（土）
直哉は午後、明治座で観劇。松居松葉の新作「敵国降伏」「熊野」を見る。左団次、寿美蔵、高麗蔵など。左団次は肩で息をしているような衰え方で、痛々しい感じがした。（日記）（『歌舞伎放談』「初世左団次」（三浦環の死）
癌をおしての左団次の舞台。左団次は八月七日没。（『続々歌舞伎年代記』坤の巻）

5・29（日）
輔仁会研究部大会を開催。（『学習院』 明治三十八年九月～三十九年八月）「輔仁会記事摘要」

直哉は、午前は有島生馬と戸山の原を散歩し、午後研究部大会に行く。邦語対話「敵愾心」が一番の出来。（日記）
〔研究部大会〕 M37・12 「学習院輔仁会雑誌」 64号「雑報」

帰りに、服部純雄から、〇〇が田村寛貞を胴上げして横腹をついたという話を聞き、腹を立てる。八時頃から田村の家で議論百出、初めは殴ることになったが、十一時頃になり、直哉が忠告することにする。（日記）

5・30（月）
直哉と林三郎との間でトラブル。直哉が〇〇と話し、今後乱暴を働かないなどの約束を取り付ける。夜、田中平一家を訪問。（日記）

5・31（火）
直哉は「独文」「歴史」の授業で当たる。学習院対城北中学の野球試合を見る。有島生馬と川村弘に昇之助の絵葉書、志賀直方に手紙を出す。『三馬集』と西鶴の下巻を注文。（日記）

*『愛読書回顧』によれば、小説家になるための勉強として、徳川期では、近松・西鶴・京伝・三馬・一九・鯉丈・春水なども読んだ。近松には感心したが、西鶴は余程後になってから感服した。京伝・春水はつまらなかった。『浮

世風呂』『東海道中膝栗毛』『花暦八笑人』の方が面白かった。

6・1(水) 帰りに直哉は木下利玄と正親町公和の家に行く。夕方から細川護立・裏松友光も来訪し、「国文」の復習。(日記)

6・2(木) 直哉は「国文」のテストはあまり出来なかったが、「The History of John Bull」はよく出来た。放課後、高一と高三の

野球の試合を見る。武者小路実篤が遊びに来るからと木下利玄を強引に自宅に誘う。夜、田中平一も来宅。田中と琴平亭の人形芝居を見に行く。「壺坂靈験記」「廓文章」(吉田屋)を見る。三馬を買って読んだ。(日記)(木下利玄日記)

6・3(金) 学習院を休み、直哉は松平春光に誘われて、東京美術学校の恤兵絵画展覧会と太平洋画会を見る。丸善でイブセンの

“Little Eyoif” (“小さなアイヨルフ”) と “The Master Builder” (“棟梁ソルネス”) を買う。渡米する田中仁之助を新橋駅に送り、「西鶴全集」を六円で買う。琴平亭で「生写朝顔話」宿屋の段と「艶容女舞衣」酒屋の段を見る。(日記)

*直哉は内村鑑三の所で知り合った小山内薫からイブセンの名を聞き、帰り道によく梗概などを聴かされ、外国文学はイブセンから読み出した。短いし、会話だけなので、怪しい語学で辞書を引きながら読んだ。(書き初めた頃)

(「稲村雑談」「読書」)(「郡虎彦のおもひで」)(「丸善の憶ひ出」)(「牛の角」)(「S君との雑談」)(「中野好夫君にした話」)(「人間」の合評家に)

*対談「志賀直哉氏の文学縦横談」によれば、「小さなアイヨルフ」や「野鴨」等を熱心に読んだ。その他、レニエという詩人のものも相当読んだ。

*直哉は、芝の骨董屋で帝國文庫の『西鶴全集』上下二冊を六円で買ったが、好色本で悪影響を受ける事を恐れ、何年か読まずにしまい込んだ。この頃の小遣いは一月六円。(書き初めた頃)(「中野好夫君にした話」)(対談「回顧」)

6・4(土) 直哉は朝から学習院に登校。夜は田中平一と小金井亭に行く。巴勝の「増補八百屋献立」、広勝の「蝶花形名歌島台」八段目、大吉の「壺坂靈験記」、昇之助の「御所桜堀川夜討」を聞く。三馬「浮世風呂」を読む。(日記)

この日、学習院で剣道大会。(「学習院」一覽 明治二十八年九月、三十九年八月)「記事摘要」)

6・5(日) 朝、直哉は三馬を読んで十一時近く黒木三次の家に行く。田村寛貞・黒木三次・柳谷午郎・松平春光・杉山得一・有島生馬・志賀直哉・中村貫之・菅田敏光・児島喜久雄・遠藤喜一・河村有恒・上田操・加太安邦・関義長・石渡荘太郎が会合。直哉はアンデルセンの『雛菊』の話をする。一年の会を青桂会と命名。(日記)

*青桂会は、上田操・関義長・前川万治郎・加太安邦・河村有恒・遠藤喜一・石渡荘太郎が同人だった。(石渡荘太郎)

6・6(月) 直哉は千秋季隆から作文を返して貰う。夜、モーパッサンの『Mad』を読む。(日記)

6・7(火) 南日恒太郎は休み。田中平一が志賀家へ来宅。夜十一時頃から直哉はイブセンの『Little Eyoif』を読む。志賀直方に

動員令が下ったとの電報あり。加藤直士『恋愛の福音』を徳川に貸す。(日記)

6・8(水) 直哉は頭痛のため終日在宅し、イブセンの『Little Eyoif』を読む。(日記)

正親町公和が直哉に自筆絵葉書を出す。(志賀直哉宛書簡集)

6・9(木) 直哉は『作文』で『Eyoifの死』を途中まで書く。演説会で『雛菊』の話をする。(日記)

6・10(金) 直哉は学習院を休み、午前中にイブセンの『Little Eyoif』を読了。午後三時半頃、武者小路実篤・吉光長一と青山学

院に内村鑑三の話聞きに行くが、六時半の誤りだったため家で遊び、七時近くに行く。帰りは田中平一の家に寄り十二時近くに帰宅。(日記)

6・11(土) 直哉は『欧州歴史』を勉強。午後、井上病院に行くが不在で、三崎座で観劇。『傾城阿波の鳴門』八段目を見る。中

西屋でダンヌンツィオの『The Dead City』(死都)とイブセンの『Brand』(ブランド)、英独両方の『若きウエルテルの悩み』等を買う。西鶴を買った店で、幸田露伴『五重塔』、斉藤緑雨『油地獄』を買う。(日記) (続々歌舞伎年代記) 坤の巻)

*『愛読書回顧』によれば、幸田露伴『五重塔』『対蹻蹻』を面白く読んだという。

- 6・12(日) 朝、直哉は井上病院に行つてから内村鑑三の家に行き、「ルカ伝」十一章の十四から二十八までの話を聞く。午後、田中平一、有島生馬が来宅。十一時頃から一時過ぎまで、イブセンの“The Master Builder”を読む。(日記)
- 6・13(月) 直哉は学習院を休み、午後から田中平一と歌舞伎座で観劇。「出世太平記」(嘉平次住居)「小野道風青柳硯」「積忍雪関扉」「薰樹累物語」「双蝶々曲輪日記」「廓鞘当」を見る。吉右衛門、市蔵、八百蔵、羽左衛門、市松、宗三郎、菊五郎、梅幸、松助、蟹十郎、時蔵、松助など。(日記)〔続々歌舞伎年代記 坤の巻〕
- 6・14(火) 朝、直哉は脳貧血で中井常次郎の診察を受ける。中西屋で、イブセンの“When We dead awaken” (“わたしたち死んだ者が目覚めたとき”)と“John Gabriel Borkman” (“ジョン・ガブリエル・ボルクマン”)を買う。井上病院に行く。夜九時頃より「西洋歴史」の勉強。(日記)
- 6・15(水) 直哉は、「西洋歴史」の試験はよく出来る。三時頃、田村寛貞が来宅。夕方、木村家へ行く。木下利玄・正親町公和が来宅。“Greek Heroes”を読む。「輔仁会雑誌」を買う。(日記)
- 6・16(木) 直哉は朝から学習院を休み、夕方から木下利玄の家に行く。(日記)
- 6・17(金) 午前中ドイツ語の文典を勉強し、午後、直哉は学習院で試験を受ける。岩倉道俱を訪問するが不在。木下利玄・武者小路実篤・吉光長一と戸山の原に行く。(日記)
- 6・18(土) 午前、直哉は家でイブセンの“The Master Builder”を読む。午後、木下利玄、細川護立、正親町公和が来宅。“The History of John Bull”の勉強をする。佐久間忠雄が来宅。夕食後雑談。田中平一が来宅。木下利玄だけ泊る。(日記) (木下利玄日記)
- 6・19(日) 直哉は七時起床、九時頃田中平一の家に行く。徳川家正も来る。(日記)
- 6・20(月) 南日恒太郎が試験を言ったので、直哉は登校したが、休みだった。夜は「論理」の勉強。(日記)
- 6・21(火) 直哉は朝少し「論理」の勉強。午後は田中平一の家に遊びに行き、晩は「輔仁会雑誌」の批評を書く。(日記)

6・22(水) 七時頃、有島生馬が志賀家に来宅。直哉と一緒に岩倉道俱の家に見舞いに行く。木下利玄の家に行き、「東洋歴史」の書き入れをする。夜「東洋歴史」の試験勉強。(日記)

6・23(木) 直哉の「東洋歴史」の試験の出来はよくない。夜十二時半頃まで、「論理」「思考論」の勉強をする。(日記)

6・24(金) 直哉は「心理」「論理」「思考論」の試験を受けるが出来ない。正親町公和と木下利玄の家に行き、「The History of John Bull」の勉強。夕方から北島貴孝も来る。(日記)

6・25(土) 直哉は熊本謙二郎の「英文」の試験を受け、帰宅後、東京座で田中平一と観劇。「東海道五十三駅」「源平魁躰躪」「復讐高田馬場」「千種桜桃戯」を見る。猿之助、女寅、寿美蔵、訥升、高麗蔵など。(日記) (続々歌舞伎年代記) 坤の巻)

6・26(日) 午前に、田村寛貞、黒木三次、柳生基夫、有島生馬、佐藤隆三、立花高木、黒田長敬、午後に川村弘、佐久間忠雄、田中平一などが志賀家に来宅。夕方から有島生馬の発起で、直哉は、佐藤隆三、黒木三次、川村弘と歌舞伎座に行き「積恋雪関扉」を見る。(日記)

6・27(月) 夜、先日の作文と「Little Eyolf」序幕切れを合わせて『脚本 雪雄』落想。(未定稿3)(日記)

兵隊が三十五人ほど志賀家に来ることになり大騒ぎ。午後、直哉は赤十字社に見舞いの後、宝亭での三年生の送別会に行く。晩、有島生馬の所へ白杉義雄・田村寛貞・黒木三次・柳谷午郎と行く。黒木三次と稻生春季との帰途、新腹案のドラマについて話す。(日記)

6・28(火) 朝七時四十分にも四谷発の汽車に乗って、田村寛貞、松平春光、佐藤隆三、木下利玄、黒木三次らと直哉は玉川へテント旅行。(日記)

6・29(水) 直哉は朝五時に起床、散歩、水泳。国分寺から汽車で一時に帰宅。有島生馬と琴平亭に行く。正親町公和も来ている。小柴の「伽羅先代萩」六段目(御殿)、花米の「日蓮聖人御法海」三段目(勘作住家)、小豊後の「絵本太功記」十段目、

団楽の「三十三間堂棟由来」(柳)、掛け合いの「本朝廿四孝」四段目(十種香)を聞く。(日記)

6・30(木)

直哉は田中平一の家によってから学習院へ登校。二十二名中十七番の成績で及第。林三郎と帰宅。イプセンの“The Master Builder”を読む。十時頃田村寛貞が来宅。卒業記念に“Schiller's Geschichte”を贈られる。木村家に行く。

(日記)

木下利玄が直哉に絵葉書を出す。(志賀直哉宛書簡集)

7・?

この前か?

有島生馬、東京外国語学校伊太利語科を卒業。ついで藤島武二の門下に加わる。(初期白樺派文学集)有島生馬年譜)ある朝、有島生馬は直哉に電話をして落ち合い、一生の仕事として油絵をすることに決めたと打ち明ける。直哉は、話を作ることは得意だったが、書くことは出来ず、生涯の仕事として何をすべきかは、まだはつきりしていなかったので、大変うらやましく思う。(蝕まれた友情)(一)

7・1(金)

午前中、直哉は草津旅行の準備。午後はイプセンの“The Master Builder”を読む。午後五時頃家を出、有島生馬と丸善に行き“Gray's poems”(グレイ詩集)を買う。宮松亭に行く。綾登司の「玉藻前職袂」三段目、広勝の「生写朝顔話」宿屋の段、万八の「御所桜堀川夜討」三段目、団楽の「三十三間堂棟由来」(柳)、大吉の「恋女房染分手綱」十段目、昇之助の「新版歌祭文」野崎村の段を聞く。岩下家一が志賀家泊。(日記)

7・2(土)

直哉は朝五時に自宅を出、六時上野発。高崎より山本直良と一緒に戻る。軽井沢泊。(日記)

7・3(日)

直哉は朝四時前に出発。和鞍の馬に乗って六里ヶ原という水樋の林を抜け応桑に出る。応桑で新八という可憐な子に会い、その事を近日書いて置こうと思う(↓未定稿8の作品リストに《新八(応桑の不具者)》とあり)。午後二時過ぎ草津着。一井旅館に泊る。田中平一、志賀家、有島生馬、田村寛貞、川村弘、木下利玄、正親町公和へ発信。(日記)(草津温泉)木下利玄宛ての絵葉書は、ここはいやな所だ、君は来なくていいことをしたとの内容。(M37・7・3木下利

玄宛書簡

一井旅館には、お宮という女中がいて、世話になった。(『草津温泉』(座談会『焚火』のころ))

7・4(月) 直哉は午前に「輔仁会雑誌」の批評を書く。夜、イブセンの「The Master Builder」を読む。(日記)

7・5(火) 直哉はイブセンの「The Master Builder」を読了。夜は京伝『濡燕ぬれつばね子宿傘こしゆくかさ』を読み、巧妙と思う。(日記)

有島生馬が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・6(水) 直哉はイブセンの「When We dead awaken」を読む。三馬『日高川清姫物語』を読み、欧州の文豪に劣らずと思う。

夜、下の座敷で芸者の義太夫などを聞く。京伝『お六櫛木曾の仇討』を読む。(日記)

木下利玄が直哉に手紙を書き、広勝と話したこと、中西屋で市川高麗蔵を見かけたこと、八月初めに正親町公和と河

口湖畔に行くので最初だけでも来て欲しいとの願いなどを記す。(『志賀直哉宛書簡』)

7・7(木) 直哉は「輔仁会雑誌」の批評を書く。三馬『吃くわ又また平ひら名な回わい助すけ太た刀とう』・京伝『長なが髭ひげ姿すがたの蛇へび柳やなぎ』を読む。(日記)

7・8(金) 直哉は三馬『玉藻前三国伝記』を読む。午後三時半頃より『脚本 雪雄』起草。(日記)(未定稿3)

7・9(土) 午後十一時半、直哉は『脚本 雪雄』脱稿。(日記)(未定稿3)

有島生馬が直哉に葉書を書く。十三日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・10(日) 直哉は京伝『敵討孫太郎虫』・三馬『雲龍九郎偷盜伝』『難有孝行娘』を読む。田中平一、草津着。(日記)

木下利玄が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・11(月) 直哉は田中平一が持ってきた「Citizen Reader」を読む。(日記)

この日、学習院卒業証書授与式。(『学習院一覽 明治三十八年九月〜三十九年八月』(記事摘要))

7・12(火) 朝、直哉はイブセンの「When We dead awaken」を読む。夜はこの地の勇大夫を呼んで義太夫の会を開くが、下手

で大失敗。(日記)(『草津温泉』)

7・13(水) 直哉は午後からトルストイの『The Spirit of Christ's Teaching』(キリストの教)を読む。(日記)

7・14(木) 直哉は夜一時前からトルストイの『The Spirit of Christ's Teaching』を読む。(日記)

7・15(金) 直哉は『雪雄』を半分ほど訂正する。(日記)

7・16(土) 直哉は『雪雄』を訂正する。体調悪し。(日記)

駒込の有島生馬が草津温泉の直哉に宛てて手紙を書く。十三日出の手紙を受け取った、面白くない所だそうだが病気の療養のためなら仕方がない、昇之助への熱がさめてきたこと、広勝が美しい乙女となったことなどを記す。(『志賀直哉宛書簡』)

木下利玄が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・17(日) 午後六時半、雨の中、直哉と田中平一は草津を出発。平一は馬に乗り、直哉は徒歩。(日記) (『草津温泉』)

7・18(月) 直哉の一行は午前一時過ぎに一軒茶屋着、五時十分頃に軽井沢着。午後一時頃上野着。(日記) (『草津温泉』)

正親町公和が草津の直哉に宛てて絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡』)

7・19(火) 朝から直哉は田中平一と歌舞伎座で観劇。福地桜痴翻案「夜の鶴」「弓張月源家鎗箭」「夏小袖」を見る。八百蔵、市蔵、吉右衛門、八百枝(児島文衛)、八十助など。(日記) (『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

夕方、木下利玄が直哉に電話をするが留守。(木下利玄日記)

7・20(水) 午後二時半から直哉は木下利玄の家に行く。午後五時頃田村寛貞の家に行き、十二社の方へ散歩。黒木三次に手紙を書く。(日記)

7・21(木) 直哉は夜田中平一と喜吉亭に行く。広勝の「玉藻前曝袂」三段目、若之助の「恋娘昔八丈」鈴ヶ森の段、東糸の「仮名手本忠臣蔵」四段目、昇之助の「近頃河原達引」堀川の段を聞く。腹を下した木下利玄も中入りから来る。(日記)

有島生馬が直哉に自筆絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・22(金) 直哉は一人で明治座で観劇。「怪異談牡丹燈籠」「恋女房染分手綱」を見る。猿之助、勘五郎、女寅、花助、芝翫、ほとん、寿美蔵など。(日記)〔統々歌舞伎年代記〕坤の巻)

木下利玄が直哉に手紙を書く。昨夜は、腹を悪くしたが、どうしても我慢できず、昇之助の「堀川」を聞きに行った、腹を治して鹿野山に行きたいなどと記す。(志賀直哉宛書簡)*21日付けとされているが22日の間違い。)

7・23(土) 直哉は田中平一に誘われ宮戸座で観劇。「鏡山錦栴葉」「八幡祭礼宵宮賑」を見る。鬼丸、寿美蔵、訥子、菊四郎、源之助、宗之助など。(日記)〔統々歌舞伎年代記〕坤の巻)

7・24(日) 午後、直哉はトルストイの“The Spirit of Christ's Teaching”を読み、夜、木下利玄を訪問。正親町公和も来る。「青年の誘惑」を読む。西鶴などは読むべきでないと考える。(日記)〔木下利玄日記〕

7・25(月) 田中平一、「雪雄」を清書して志賀家に持ってくる。直哉はトルストイの“The Spirit of Christ's Teaching”を読む。(日記)

舞子の川村弘が東京の直哉に手紙を出す。帰京の葉書を受け取った、「読売新聞」の昇之助と千松の比較論は愚論だなどの内容。(「芳舟遺稿」所収川村弘書簡)

7・26(火) 朝八時越前堀発の汽船で、有島生馬、田村寛貞、黒木三次、松平春光、志賀直哉が鹿野山に行く。丸七泊。(日記)

7・27(水) 直哉らは九十九谷に行く。(日記)

7・28(木) 直哉らは朝八時に宿を出て帰京。梅園で川村弘ら他の会員に寄せ書きの葉書を送る。晩、黒木三次と喜吉亭に行く。

昇之助の「本朝廿四孝」四段目(十種香)を聞く。(日記)〔「芳舟遺稿」所収7・30川村弘日記〕

7・29(金) 夜、直哉は真砂座で観劇。伊原青々園作「ニコラス皇帝」よりの「恋とくせ者」、ドーデー作「サッフォー」を見る。

河合武雄、藤沢浅次郎、伊井峯峰など。サッフォーが愛は秋谷、肉体は小野田に捧げる煩悶が気に入る。(日記)〔統々歌舞伎年代記〕坤の巻)

この日、有島生馬は帰阪する昇之助に『即興詩人』を贈った。(日記) ↓ 『蝕まれた友情』(二)

木下利玄が直哉に絵葉書を書き、昇之助のこゝと、広勝と話したこと、明日午後訪問したいことなどを記す。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・30(土)

午前、直哉は荒川でひげ面の写真を撮り、一月半ぶりにそり落とす。午後、田中平一、木下利玄、正親町公和が来宅。夜、木下利玄・田中平一と喜吉亭に行く。広勝の「艶容女舞衣」酒屋の段、東糸の「新版歌祭文」野崎村の段、昇之助の「傾城阿波の鳴門」八段目を聞く。(日記)

7・31(日)

朝、直哉は井上病院に行くが転居。正親町公和の家に行くと木下利玄もいる。夜、喜吉亭に行く。広勝の「鶴山姫捨松」(中将)、昇之助の「廓文章」(吉田屋)、掛け合いの「仮名手本忠臣蔵」七段目を聞く。(日記)

夏

山東京伝・式亭三馬時代の写実小説にありそうな会話だと思つて、若い男女の会話を写す。(未定稿69「せめふさげ」(手帳6)補⑤P146~147)

この頃か?

「帝國文学」に連載(M37・8、9、10、12、M38・3)の小山内薫の戯曲『非戦闘員』を直哉は読んだが、少しも感服しなかった。(『人間』の合評家に『])

8・1(月)

午後、直哉は、トルストイの『The Spirit of Christ's Teaching』を読了。《吾れに愛なき事は総ての事実によりて思ひ合はざるゝは情なし》と日記に記す。夜は、イブセンの『When We dead awaken』を読み、有島生馬に手紙を書き、『紅葉全集』を読む。林三郎から林莊次郎の『成る程の記』を贈られる。(日記)

川村弘・有島生馬から来信。(日記) (『志賀直哉宛書簡集』)

8・2(火)

午前、直哉はプッフハイムを勉強。午後はイブセンの『When We dead awaken』を少し読む。皆川書店で『歌舞伎』を受け取る。夜、田中平一が来宅。岩下家一に手紙を書き、『紅葉全集』を読む。(日記)

8・3(水)

直哉は、志賀直方から手紙を受け取る。(日記)

8・4(木) 『妙々車』を見ると、著者は種彦、画は国貞のものだったので、直哉は違うものを探したがなかった。熊吉の家の豊国の挿絵のものを貰う。『紅葉全集』の『隣の女』『鷹料理』『三箇条』『八重だすき』を読む。『京伝傑作集』『種彦傑作集』が来る。(日記)

この日、菊池大麓が学習院長となる。(学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月)「記事摘要」

8・5(金) 直哉は、日記に粹について記す。午前、イブセンの“*When We dead awaken*”序幕を読了。午後、田村寛貞、松平

春光、木下利玄、田中平一が来宅。トルストイの“*The Spirit of Christ's Teaching*”を、黒木三次に貸してくれと、田村寛貞に渡す。半年ぶりに、岩倉道俱から病気が快方に向かったとの葉書が来る。返信。夜十一時半頃より、内村鑑三の『基督信徒の慰』を読む。(日記) (木下利玄日記)

木下利玄が直哉に手紙を書く。(志賀直哉宛書簡)

8・6(土) 直哉は、不眠気味。相馬家で国貞の似顔絵帖、種彦などの草双紙を借りる。午後、柳谷午郎が来宅。正義を守るより

大なる事業はないと日記に記す。(日記)

有島生馬が直哉に葉書を書き、昨日は招いてくれたのに失礼したと詫げる。(志賀直哉宛書簡集)

8・7(日) 直哉は、『比羅絵師仕事場の喜劇』を九頁程書き、午後五時頃より来宅した有島生馬に贈る。『雪雄』の朗読をする。

二幕の幕切れにゲーテの『魔王』を演奏する事を思いつく。市川左団次が死去。(日記)

8・8(月) 晩、直哉は田中平一と一ツ木を散歩し、二代豊国(国貞)の『梨園侠客伝』三十六枚続きを買う。トルストイの“*The*

Crust of Bread” (パンの皮) を読む。(日記)

8・9(火) 直哉は朝から田村寛貞を訪問、七時少し前に帰宅。午後九時半から『雪雄』朗読の稽古。(日記)

8・10(水) 直哉は塔ノ沢の福住に行くことにし、一日かけて準備。夜九時頃、岩下家一が来宅。箱根には、イブセンの“*When*

We dead awaken” 尾崎紅葉『多情多恨』、「近頃河原達引」、小栗風葉『恋女房』、「*Rebirth of Tolstov's Stories*」

“Greek Heroes”、【児童心理学】、内村鑑三の『基督信徒の慰』『求安録』『愛吟』などを持って行く。(日記)

8・11(木) 志賀家一行、午前六時に新橋を発ち、十時十五分頃、福住着。夜、義太夫会あり。(日記)

箱根に行く時、直哉は国府津からの電車で美しいお嬢さんと向い合せた。この人のことは帰ってから一週間くらい頭についた。(草稿『第三篇』四)

8・12(金) 直哉は八時十五分に福住を出発、十時半頃、元箱根飯田着。服部他之助、田村寛貞、黒木三次、菅田敏光、三浦直介、

武宮雄彦と合流。松坂の林三郎、三条公輝を訪問。午後、水泳。夜、服部に、スタンレイの話、ミルトンの“Paradise Lost”(『失楽園』)の話をして貰う。(日記)

8・13(土) 直哉は船で平岩の方に行き、水泳、真珠取りなどをする。北尾富烈、裏松友光、松村務らと会う。夜、服部他之助にスコットランドのお伽噺を聞く。(日記)

8・14(日) 服部他之助は帰京。午後、直哉、黒木三次、三浦直介、菅田敏光、武宮雄彦で Moss Bed に行く。柳谷午郎、松方義輔、里見淳、吉田が来る。(日記)

8・15(月) 朝、直哉ら一同、権現の森に舟をつなぐ。有島生馬も来る。(日記)

8・16(火) 朝、直哉は、Otto と Gus とセーリング。(日記) ↓ 未定稿 38 『小説「ブラックマライヤ」』のモデル

舞子の川村弘が河口湖の正親町公和・木下利女に手紙を出す。直哉と寄せ書きの手紙を読んだ、アウフが箱根に行き、次いで直哉・有島生馬が箱根に行き、正親町公和・木下利女が箱根に行こうとしているとの記述あり。(『芳舟遺稿』所収川村弘書簡)

8・17(水) 朝、直哉は、松方義輔・柳谷午郎と元箱根を出発。直哉は福住に泊まる。(日記)

8・18(木) 直哉は服部他之助に英文の手紙を送る。(日記)

8・19(金) 直哉は再び元箱根へ登る。帰京する裏松友光・松村務のために学習院滝で送別会。Gus に “Greek Heroes” を贈る。

（日記）

舞子の川村弘が東京の直哉に手紙を出す。（『芳舟遺稿』所収川村弘書簡）

8・20（土） 午前、直哉は帰京する裏松友光・松村務を見送る。午後、林三郎らの所に行く。（日記）

8・21（日） 直哉は福住に滞在する家族から、今日帰京するので午前中に来るようにという知らせを受け、駆けつける。五時すぎに新橋着。有島生馬を訪問。（日記）

8・22（月） 朝、田中平一が志賀家に来宅。午後、直哉は京橋の松井で『俳優楽屋通』を買う。歌麿の口絵、豊国の似顔絵。国貞の「菊の丞」「雪月花」を買う。真砂座で観劇。「夜火雨洞」「金の成る木」を見る。高田実など。（日記）（『続々歌舞伎年代記』坤の巻）

8・23（火） 直哉は、歌麿の「八段目の道行」が欲しいが見つからず、尾張屋で簾の寝台と椅子を買う。（日記）

8・24（水） 直哉は腹を悪くし、中井常次郎の所に行く。京橋の須訪で歌麿を見、松井で国貞の「車曳人形」の三枚続きを買う。

（日記）

有島生馬から疑似赤痢になったとの葉書が来る。（日記）（『志賀直哉宛書簡集』）

8・25（木） 直哉は銀座で歌舞伎の俄の「五段目山崎街道」を見る。鶴屋団十郎の四人早替わり。（日記）

有島生馬が直哉に葉書を書く。二十六日の消印。手紙を貰った礼。（『志賀直哉宛書簡集』）

8・26（金） 直哉は木下利玄・岩倉道俱を訪問するが不在。午後米津政賢を訪問。帰途、京橋の須訪で歌麿の「まくら童子」「梅

忠道行長絵」、豊国の「講四郎」を買う。（日記）

8・27（土） 直哉は田中平一と宮戸座で観劇。「刻煙草浪花土産」「鈴ヶ森」「心中天網島」を見る。鬼丸、源之助、訥升、寿美藏など。（日記）（『続々歌舞伎年代記』坤の巻）

歌麿の「傾城」を買って帰宅。三浦直介・柳宗悦・菅田敏光が来宅、三浦の転校について相談。（日記）

8・28(日) 直哉は、田村寛貞と共に三浦家に行き、三浦直介の転校について父の三浦泰輔と話す。夜、米津政賢、有馬生馬も来宅。(日記)

木下利玄が直哉に葉書を書く。一昨日は塔ノ沢にいたので留守にしたとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・29(月) 有馬生馬は伊香保に行く。直哉は午後、服部他之助の家に行き、三浦直介のことや、今後、服部が直哉らや新四年生のために会合を開くこと(「木曜会」)について話す。田中平一と柳生基夫が来宅。(日記)

*この夏か? 服部他之助が、鳥野幸次と共に、主管を勤める学習院中等学科三年生の有志(前田利功、柳宗悦、菅田(のち山田)正次、古川達四郎、佐野佐、岩倉(のち鮫島)具重、武宮雄彦、柳沢保承、松平定晴、三浦直介)と監督役の黒木三次を引率して赤城旅行。九月から、木曜日の夕食後、赤坂榎町の服部他之助の家に、赤城旅行のメンバーを中心とする新四年生の有志、黒木三次、志賀直哉を集め、英語の本の講義、泰西の格言などについての解説、茶菓を飲食しながらの雑談などを行った。カーライルの“Heroes and Hero Worship”(『英雄崇拜論』)、ストーリー夫人の“Uncle Tom's Cabin”(『ファンクル・トムの小屋』)、ミルトンの“Paradise Lost”、“Stories from Virgil”などを扱った。(三浦直介『服部先生・柳宗悦』恩師服部先生』「自然と生活 附 追想録」)

8・30(火) 亡母の命日のため、直哉は青山墓参。午後、木下利玄が来宅。歌麿の錦絵、初代豊国の役者の似顔絵などを見せる。夜は泉鏡花の『起誓文』のスケッチの所を直哉が読み、『紅葉全集』第二編の『女の顔』『花ぐもり』『伽羅もの語』を木下利玄が読んで批評する。九時半頃、箱根より帰りがけの黒木三次が三浦直介を連れてきて、三浦の転校について相談する。(日記)(木下利玄日記)

8・31(水) 朝、直哉は黒木三次と共に服部他之助の家に行く。三浦直介・菅田敏光がいる。鏡花の『柳小島』(M37・9「文芸倶楽部」)を読む。(日記)

伊香保の有馬生馬が直哉に手紙を書く。一日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)